

第44回 歯科衛生研究会

平成28年3月

講演抄録集

日時 / 平成28年3月9日(水) 第一部 午後2時
第二部 午後6時

会場 / 日本歯科大学新潟生命歯学部アイヴィホール

日本歯科大学新潟短期大学

歯科衛生研究会

会 長 又賀 泉

副 会 長 池田裕子、宮崎晶子

実行委員長 今井あかね

副実行委員長 小菅直樹

企画運営委員 中村直樹、浅沼直樹、石山巳喜夫、佐藤律子、三富純子、
土田智子、元井志保、平野恵実

庶務連絡委員 佐藤治美、筒井紀子、菊地ひとみ、煤賀美緒、坂井由紀、
吉富美和

事務担当委員 熊木由美子

[一般口演・口演者の方へ]

- 1) コンピュータで投影をする方は、発表データのUSBフラッシュメモリーまたはCD-Rを持参して下さい。
- 2) 当日 13時00分～13時40分と16時30分～17時50分に、コンピュータ投影テストおよび予備のノートパソコンへのデータの保存を行ないますので、都合の良い時にデータを持って会場にお越しください。
- 3) 一般口演の発表時間は8分（予鈴7分で青ランプ、終鈴8分で赤ランプ）、討論時間は4分です。
- 4) その他のお知らせ事項は、当日受付で致します。

第44回 歯科衛生研究会プログラム

日時 平成28年3月9日(水)

第一部 14時00分～14時55分

第二部 18時00分～19時18分

会場 日本歯科大学新潟生命歯学部 アイヴィホール

<14:00-14:03>

「第一部 開会の辞」 副会長 池田 裕子

第 一 部

座長 池田 裕子

<14:03-14:15>

1. 歯科治療時のストレス緩和に向けたアロマ効果の検討

～クロモジ精油およびラベンダー精油の効果～

○五十嵐香織¹、筒井紀子²、富樫万理³、桑島治博⁴、福井佳代子⁴、今井あかね² (1日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学専攻、²新潟短期大学、³光産業創生大学院大学、⁴新潟生命歯学部薬理学講座)

<14:15-14:27>

2. 唾液分泌に対するガム味の影響について

○小林由真¹、土田智子²、佐藤律子² (1日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学専攻、²新潟短期大学)

座長 坂井 由紀

<14:27-14:39>

3. 歯の外因性色素沈着に関わる歯周病原菌の解析

○諏方菜都希¹、松田貴絵²、菊地ひとみ³、今井あかね³ (1日本歯科大学新潟短期大学専攻、²新潟生命歯学部小児歯科学講座、³新潟短期大学)

<14:39-14:51>

4. 歯科保健指導に応用するモチベーション方法の検討

○布川 蒔¹、中村直樹²、元井志保² (1日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学専攻、²新潟短期大学)

<14:51-14:55>

「第一部 閉会の辞」 坂井 由紀

<18:00-18:03>

「第二部 開会の辞」 会長 又賀 泉

第 二 部

座長 藤田 浩美

<18:03-18:15>

5. 歯科衛生科平成26年度教育グループ活動報告

～研修会・学会参加状況からみる教育活動～

○畠由美子、中島瑞恵、遠藤祐香、坂井由紀 (日本歯科大学新潟病院歯科衛生科)

<18:15-18:27>

6. エナメル質進化の運命を決めた2つの遺伝子

○石山巳喜夫¹、三上正人²、岡 俊哉³、笹川一郎⁴ (1日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科、²新潟生命歯学部微生物学講座、³新潟生命歯学部生物学講座、⁴新潟生命歯学部先端研究センター)

<18:27-18:39>

7. 歯科衛生士および病院実習後の歯科衛生士学生におけるうつ病の認識に関する調査

○石井瑞樹¹、大津光寛²、藤田結子²、軍司さおり²、若槻聡子³、星川結香³ (1日本歯科大学新潟病院総合診療科、²附属病院総合診療科、³附属病院歯科衛生士室)

座長 拝野 敏子

<18:39-18:51>

8. 選択的動注化学療法併用放射線療法における口腔粘膜障害

～RTOGグレードを使用した症例調査～

○村山史子¹、宮島孝子¹、田中伸枝¹、戸谷収二² (1日本歯科大学新潟病院看護科、²新潟病院口腔外科)

<18:51-19:03>

9. H27年度学術・研究グループ活動報告

○金子文乃、星 美幸、岩野貴子、野島恵実 (日本歯科大学新潟病院歯科衛生科)

<19:03-19:15>

10. 院内感染防止対策グループ ～ラウンド結果からの今後の課題～

○関根千恵子、山崎明子、相方恭子、松木奈美 (日本歯科大学新潟病院歯科衛生科)

<19:15-19:18>

「第二部 閉会の辞」 副会長 宮崎 晶子

| | |
|---|---|
| <p>1. 歯科治療時のストレス緩和に向けたアロマ効果の検討 ～クロモジ精油およびラベンダー精油の効果～</p> | |
| 新潟短期大学専攻科 新潟短期大学 光産業創生大学院大学 新潟生命歯学部薬理学講座 新潟短期大学 | ○五十嵐香織 筒井紀子 富樫万理 桑島治博、福井佳代子 今井あかね |
| <p>【目的】 歯科治療には、不安、痛み、不快な音など身体的・精神的ストレス負荷が伴う。そのため、手軽に患者のストレスを緩和できる方法を考えることはより良い治療環境を提供することにつながる。今回、治療中におけるストレスを手軽に緩和できる方法としてアロマセラピーに着目して実験を行った。</p> <p>【方法】 対象者は健康成人女性合計 27 名（18～21 歳）とした。対象者を、芳香浴として精製水を使用したコントロール群、真正ラベンダー精油を使用したラベンダー群、クロモジ精油を使用したクロモジ群の 3 群に分け、各群ストレス負荷（内田クレペリンテスト）前後に、バイタル（血圧、脈拍数）および唾液中のストレス物質 {クロモグラニン A (CgA)、コルチゾール、アミラーゼ} を測定した。</p> <p>【結果】 全群において脈拍数および収縮期血圧に関して、有意差は見られず、拡張期血圧はコントロール群において、ストレス負荷後に有意な上昇傾向が認められた。唾液中のストレス物質を測定したところ、コントロール群に関してはストレス負荷後に CgA 濃度およびコルチゾール濃度が上昇し、クロモジ群は CgA 濃度、コルチゾール濃度、アミラーゼ活性に特に変化がなかった。クレペリンテストの回答数はラベンダー群、クロモジ群、コントロール群の順で多かった。</p> <p>【考察】 コントロール群の拡張期血圧がテスト後に上昇していることから、クレペリンテストによりストレス負荷が掛っていると考えられた。アロマの効果としてクロモジおよびラベンダー群の血圧がストレス負荷後に有意な上昇を認めなかったことから、芳香浴を行うことでリラックス効果があるのではないかと考えられた。</p> <p>唾液中のストレス物質の結果から、ラベンダー精油とクロモジ精油で芳香浴を行ったときのストレスマーカーの発現様式が異なるのではないかと推察できた。</p> <p>【結論】 ① ラベンダー精油の芳香浴下では、ストレス負荷による唾液ストレスマーカー（CgA、コルチゾール、アミラーゼ）の上昇が認められた。② クロモジ精油の芳香浴下では、ストレス負荷による唾液ストレスマーカーに変動が少なかった。今後アロマの応用が期待される場所であるが、本研究はその基礎的なデータとなった。</p> | |

| | |
|--|--------------------|
| <p>2. 唾液分泌に対するガム味の影響について</p> | |
| 新潟短期大学専攻科 新潟短期大学 | ○小林由真 土田智子、佐藤律子 |
| <p>【目的】 近年、超高齢社会に伴い口腔乾燥を訴える人が増加している。特に口腔乾燥を感じる人は有病高齢者に多く、服用している薬剤の副作用が原因で引き起こされる傾向が強いと考えられている。また、若年者においても、口腔乾燥を訴える割合が多くなっている。口腔乾燥の改善には様々なものが存在するが、咀嚼刺激を利用して唾液分泌促進が得られるガムがある。本研究では、味の異なるガムによる唾液分泌量の変化を明らかにするため、刺激唾液分泌量を測定した。</p> <p>【方法】 対象者は、日本歯科大学新潟短期大学学生および職員 13 名(平均年齢 34.2±12.3 歳、女性)で、採唾 1 時間前の口腔清掃、喫煙を禁止し、測定肢位は座位で行った。先入観を排除した状態で 4 種類の味の異なるガムを咀嚼し、唾液分泌量を測定した。なお、コントロールとして無味のワックスを用いた。また、測定開始前後にアンケートを実施し、ガムの嗜好傾向および日常生活でのガムの利用状態を調べた。</p> <p>【結果】 唾液分泌量は、ブルーベリー 6.13±1.24 g、梅 6.12±1.48 g、レモン 5.52±1.56 g、ミント 4.00±1.76 g、ワックス 1.23±0.95 g、自然唾液 0.66±0.39 g で、ブルーベリー味が最も高値を示した。また、多重比較においてワックスと各 4 種類のガムの間に有意差を認め、味付きガムの間ではミントとブルーベリーの間に有意差を認めた。</p> <p>【考察】 事後アンケートと平均唾液分泌量を比較した場合、唾液分泌量が多かったブルーベリー、梅は事後アンケートからも好みであるといった回答が多かった。また、味付きガムのうち最も唾液分泌量が少なかったミントではアンケート結果からも唯一「少し唾液が出にくい」と回答した者がおり、「好みではない」といった意見が見受けられた。以上のことから、対象者の好みの味であるか否かは唾液分泌量へ影響していることが示唆された。また、酸味の強いものに関しては、味覚刺激や嗅覚刺激以外にも先入観によって唾液が出やすく、そういった経験に基づく条件反射も唾液分泌量に左右すると考えられた。</p> <p>【結論】 結果から、身近にあるガムの唾液分泌促進を目的として応用する際には、ブルーベリーや梅、レモンの味が有効であることが示された。幅広い世代で口腔乾燥を訴える人が増加している現在、歯みがきの代用や空腹時、眠気覚ましといった目的でのガムの摂取のみならず、唾液分泌量を増加させる目的での応用が期待される。</p> | |

| |
|---|
| <p>3. 歯の外因性色素沈着に関わる歯周病原菌の解析</p> |
| <p>新潟短期大学専攻科 ○諏方菜都希 新潟生命歯学部小児歯科学講座 松田貴絵 新潟短期大学 菊地ひとみ 今井あかね</p> |
| <p>【緒言】 近年、タレントや各種メディア等の影響により歯の審美性が注目されている。特に若年成人女性においては「白い歯」に対する関心が高まっており、歯の色に興味を持っている。歯の外因性色素沈着の一つである black stain は歯周病原菌の一種である <i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i> (A.a.菌) が関与していることが報告されている。歯の色素沈着と歯周病原菌の保菌状態との関連性は示唆されているものの、明確には述べられていない。そこで本研究において、口腔内のプラーク中に存在する歯周病原菌と歯の色素沈着の関係性を解明することを目的とし、健常若年成人女性の歯冠色および歯周病原菌の保菌状態を解析した。</p> <p>【対象および方法】 日本歯科大学新潟短期大学学生および専攻生 54 名とした。被験者からプラークを採取し、シェードガイドによる歯冠色の評価および茶渋の有無を記録した。同時に歯の色に関するアンケートを実施した。採取プラークから調製した DNA を基に各歯周病原菌に特異的なプライマーを用いて PCR を行い、遺伝子増幅産物のサイズから歯周病原菌 (<i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i>, <i>Porphyromonas gingivalis</i>, <i>Tannerella forsythia</i>, <i>Treponema denticola</i>, <i>Prevotella intermedia</i>) の同定を行った。</p> <p>【結果および考察】 アンケート結果より自身の歯が着色しているか「気になる」と答えた者が多かった。歯冠色を色調別に XL、A1、A2 の白色群、A3、B2、B3 の着色群で分けたが、白色群であるにもかかわらず「黄色い」と答える者がいた。このことから白い歯が普通の色として捉えられている傾向であった。歯の着色と歯周病原菌の平均保菌種類数をそれぞれ統計分析した結果、有意に ($p < 0.01$) 着色群のほうが多く、歯の着色と歯周病原菌の保菌状態の関連が示唆された。しかし、色素沈着の原因である飲食物や唾液成分なども含めた考慮が必要だと思われる。茶渋を保有している人は白色群に多かったが、平均保菌種類数では、有意に ($p < 0.01$) 着色群のほうが多く、茶渋と歯周病原菌の関連も示唆された。なお、着色群に属する A.a.菌の保有者は茶渋を保有していた。そのため、A.a.菌は鉄イオンを介した食物性の色素沈着にも関与している可能性が推察された。</p> |

| |
|---|
| <p>4. 歯科保健指導に応用する モチベーション方法の検討</p> |
| <p>新潟短期大学専攻科 ○布川 蒔 新潟短期大学 中村 直樹、元井 志保</p> |
| <p>【目的】 歯科疾患の予防はプラークコントロールが第一であり、歯周基本治療でもブラッシングや歯間ブラシなどを用いたセルフケアの指導が重要な位置を占めることは広く知られている。しかし実際に、患者に指導をしてもなかなか改善しないことや、一度プラークコントロールが確立してもそれが持続しないこともあり、行動変容は容易ではないことを実感した。</p> <p>PMTC に関する文献では「PMTC には口腔衛生の動機付けの効果がある」と述べられているが、なぜ PMTC を行うことが患者のモチベーションとなり、セルフケア行動にも良い影響があるのか疑問に思った。さらに PMTC の他にも動機付けの効果がある手法はあるのだろうか興味を持った。</p> <p>そこで、行動変容させるための基本的な理論と、モチベーションとなりうる手法を文献などから検索し、実際の臨床で応用するために考えをまとめた。</p> <p>【結果および考察】 患者の意欲を引き出して行動変容をさせるための歯科保健指導を行うにあたって活用できる基本的な理論として、内発的動機づけ、行動変容ステージモデル、自己効力感、健康信念モデルが挙げられた。実際に行動変容につながるモチベーションの手法を文献などから検索し、臨床で応用できるものを考察した。その結果、電動歯ブラシの使用と PMTC、視覚的教材の使用、口臭検査と細菌検査などの方法が渉猟された。様々なモチベーションの手法がある中で患者に合ったものを選択するには、行動変容ステージモデルを把握し、それに合わせた介入をする必要があると考え、ステージごとに実際にどのようなアプローチをしたらよいか考察を加えた。</p> <p>現在、歯科医療でもコンプライアンス (=患者が医者の言う通りに行動をする) からアドヒアランス (=患者と医師が相互理解し、患者が意思決定して治療協力する) への移行が推進されている。歯科保健指導でも患者にセルフケアの方法を押し付け、言われたとおりのケアをさせるのではなく、患者自身が自分に合う用具や清掃方法を選択でき、そのうえに自ら考えて保健行動が実践できるよう支援することが最も重要であると思われた。</p> |

| |
|---|
| <p>5. 歯科衛生科平成 26 年度教育グループ活動報告 ～研修会・学会参加状況からみる教育活動～</p> |
| <p>新潟病院歯科衛生科 ○畠由美子、中島瑞恵 遠藤祐香、坂井由紀</p> |
| <p>【目的】われわれ教育グループでは平成 26 年度の歯科衛生科の教育活動における短期目標を「学内外の研修会に積極的に参加し、臨床の場に活かす」として活動してきた。活動のひとつとして、学術・研究グループと共同で学内外の研修会・学会の参加状況の調査を行っている。今回、平成 26 年度の集計と平成 25 年度との比較検討を行なったので報告する。</p> <p>【対象】新潟病院歯科衛生科 31 名</p> <p>【方法】平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月まで毎月、学内外の研修会・学会の参加状況の有無を調査した。また、平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月までの調査結果との比較、配属科による参加回数の比較等を行なった。</p> <p>【結果】平成 26 年度において、学内での研修会は計 28 開催され、そのうち歯科衛生科からの参加を認めたのは 19 であった。1 人当たり平均 9.81 回（最大 13 回最少 6 回）の参加を認めた。平成 25 年度（以下前年度）は 23 開催、平均 6.97 回であった。学外では 31 の研修会・学会への参加が確認され、1 人当たり平均 2.16 回（最大 13 回最少 0 回）の参加を認めた（前年度 25 参加、平均 2.52 回）。学外での参加状況を総合診療科（以下、総診とする）と総診以外の科で比較すると、総診が 1 人当たり平均 1.00 回に対し、総診以外の科では 1 人当たり平均 3.00 回の参加であった。</p> <p>【考察】学内の研修会・学会において、前年度に比べて参加回数の増加につながったのは、歯科衛生士も興味を持つ内容が多かったことが考えられる。学外では前年度とほぼ同じであったのは、参加する研修会数は増えたものの各回の参加者数が少数であったためと考えられる。</p> <p>総診と総診以外の科での比較では、前年度同様、学外での参加回数に差が認められた。訪問口腔ケア・インプラント関連等での研修会に関して顕著であり、学内での研修会の開催も望まれている可能性が考えられ、今後の歯科衛生科での現任教育の内容決定の参考になると感じた。</p> <p>なお、参加状況集約の際に向こう 1 か月の学内外研修会情報として日時と場所を掲載したものを配布しているが、更に詳しい情報や先々の情報を知りたいという声も挙がってきている。周知の仕方の工夫が今後必要と思われる。</p> <p>来年度以降もこの活動を継続することで各グループの現任教育に活かし、さらなる歯科衛生科の教育活動に努めていきたいと考える。</p> |

| |
|---|
| <p>6. エナメル質進化の運命を決めた 2 つの遺伝子</p> |
| <p>新潟短期大学 ○石山巳喜夫 新潟生命歯学部微生物学講座 三上正人 生物学講座 岡 俊哉 先端研究センター 笹川一郎</p> |
| <p>【目的】エナメル質の主要蛋白であるアメロジェニンの遺伝子は、哺乳類のみならず爬虫類さらに両生類まで塩基配列が明らかにされている。しかし、エナメル質を持っているにもかかわらず、肉鰭類の肺魚やシーラカンス、さらに条鰭類のガーパイクといったいわば古代魚の遺伝子については何も明らかにされていなかった。我々は、エナメル質の進化的源流を訪ねる目的で、これら古代魚のアメロジェニン遺伝子のクローニングを試み、分子生物学的解析を実行した。</p> <p>【材料と方法】肺魚、シーラカンスおよびガーパイクからそれぞれ RNA の抽出が可能な状態の新鮮な試料を入手して、cDNA ライブラリーの作製をおこない、これをテンプレートにして RT-PCR 法によりアメロジェニン遺伝子のクローニングを試みた。</p> <p>【結果】試行錯誤を重ね、およそ数千回の実験を行った結果、ようやく肉鰭類の肺魚とシーラカンスからアメロジェニン遺伝子のクローニングに成功した。これらはいずれも陸生動物に比べ構成する残基数が少なく全長の短いものであった。一方、同じくエナメル質を発現している条鰭類のガーパイクからはアメロジェニン遺伝子をクローニングすることができなかったが、アメロジェニン遺伝子に部分的に良く似た配列を示す遺伝子をクローニングし、未知の遺伝子であったことからガノイジェニンと命名（仮称）した。</p> <p>【考察】魚類は、大別して条鰭類と肉鰭類に分けられるが、後者は両生類を生み、やがて我々哺乳類へと進化した系統である。本研究でこれらの魚類にも共通してアメロジェニンが存在することが明らかになり、本蛋白はエナメル質の指標物質になっていることが証明された。一方、条鰭類のガーパイクはエナメル質を持っているものの、アメロジェニンを持たず、代わりにガノイジェニンを持っていることが解明された。この遺伝子は免疫組織化学および <i>in situ hybridization</i> による検索で、エナメル質と鱗のガノイン層を形成する上皮性細胞に特異的に発現していることが明らかにされ、これによりアメロジェニンを主要蛋白とする組織がエナメル質、ガノイジェニンを主要蛋白とするのがガノイン層というように区別できることが立証された。両者はおよそ 4 億年前に肉鰭類と条鰭類が分かれた際に、歯の上皮性蛋白の遺伝子として獲得されたものと推察される。</p> |

| | |
|---|---------------------------------------|
| 7. | 歯科衛生士および病院実習後の歯科衛生士学生におけるうつ病の認識に関する調査 |
| 新潟病院総合診療科 | ○石井瑞樹 |
| 附属病院総合診療科 | 大津光寛、藤田結子 軍司さおり |
| 附属病院歯科衛生士室 | 若槻聡子、星川結香 |
| <p>【目的】我が国の自殺総合対策大綱では、自殺予防対策の一つにゲートキーパーの養成を掲げている。歯科医療従事者は、日常臨床の場や地域、学校、職域などで多くの人と接する機会が多いことから、専門的知識をもつ身近なゲートキーパーとしての役割を担えると期待されている。精神疾患やそれに近い状態の人が存在すると、気づき、話を聞き、必要な支援に繋げるための正しい認識と対応が求められる。このような背景から、本調査は自殺と特に関連が強いうつ病に着目し、歯科医療従事者、歯学部学生、歯科衛生士学生のうつ病に対する認識についての把握を目的として実施した。また、今後の歯科医学教育でのうつ病に関連する教育の重要性と方向性についても考察する。</p> <p>【方法】アンケート調査は、本学附属病院と新潟病院の歯科医師および歯科衛生士、本学生命歯学部と新潟生命歯学部4年生および5年生、本学東京短期大学と新潟短期大学の病院実習生を対象に実施した。うつ病の症状や訴えの認識に関する質問は、うつ病の自己評価尺度であるPHQ-9とSDSを参考に作成した。今回は、新潟病院歯科衛生科の歯科衛生士(以下、DHとする)および新潟短期大学の平成26年度病院実習生(以下、実習生とする)についての調査結果を報告する。</p> <p>【結果】DH29名、実習生60名から回答を得た。患者さんのうつ病を疑った場合に紹介できる専門機関を知っている者は、DHで44.8%、実習生で15.0%であり、DHで多く有意差が認められた。今までにうつ病や精神疾患について学ぶ機会があった者は、DHで20.7%、実習生で15.0%であった。精神疾患等の症状や訴えの認識に関する回答をDHと実習生とで比較した結果、DHが全ての項目で重要度を高く評価し回答する傾向がみられ、うち7項目で実習生との回答の違いに有意差が認められた。</p> <p>【考察】質問にはうつ病以外の精神疾患における重要症状も含まれていることから、DHでは、実習生に比べて何らかの精神的な異常や訴えを感知できているもの、必ずしもうつ病の症状を正しく認識できているとはいえないと推察された。また、対象者全体でうつ病の学習機会が無かったと回答した者が8割以上を占め、卒前卒後の教育において、うつ病についての知識習得が十分ではない現状にあることが示唆された。</p> | |

| | |
|--|---|
| 8. | 選択的動注化学療法併用放射線療法における口腔粘膜障害 —RTOG グレードを使用した症例調査— |
| 新潟病院看護科 | ○村山史子 宮島孝子、田中伸枝 |
| 新潟病院口腔外科 | 戸谷収二 |
| <p>【目的】選択的動注化学療法併用放射線療法は、頭頸部・口腔癌治療の一法として、当科において多く用いられている。当科では放射線療法による口腔粘膜障害をRTOG基準で評価し、看護計画に基づき口腔粘膜状態、食事摂取状況、鎮痛剤の使用状況を観察し、副作用に応じた看護ケアと指導を行っている。今回、選択的動注化学療法併用放射線療法を行った患者の口腔粘膜の副作用と看護を振り返り今後にかつことを目的とした。</p> <p>【方法】対象は2012年1月～2015年4月に当科に入院し、動注併用放射線療法を行った口腔癌患者14例。評価はRTOG放射線粘膜炎症グレード別副作用分類を用い、看護計画に基づき行った看護ケアと口腔粘膜障害の状態を看護記録から調査した。</p> <p>【結果】口腔粘膜障害出現時期は、照射16～22Gyが最も多かった。含漱薬の開始はグレード1～2であった。食事形態変更時期は、口腔粘膜障害出現から照射終了まで食事変更が36%、照射終了1週間後では14%であった。鎮痛薬内服は、照射開始前から50%と最も多かった。グレード2以上からは、43%で定期内服を合計すると93%であった。</p> <p>【考察】選択的動注化学療法併用放射線療法は、単独の照射よりも16～22Gy(56%)と比較的早期に口腔粘膜障害がみられた。48～60Gy(28%)が次に多いのは、長期休暇による照射休止期間で一度粘膜が回復したことが要因と考えられる。含嗽薬は、RTOGグレード別対処方法ではグレード3で開始とされているが、粘膜炎や患者の訴えに応じ1～2で開始したことが分かった。口腔ケアは、認知症やADL障害でセルフケアが困難な場合は、看護師が準備、見守り、介助を行いケアの指導に努めており、歯科衛生士による定期的口腔内保清は、感染予防に効果があると考えられる。食事は全期間を通して経口摂取できていた例が多かった。看護師は食事摂取量を確認し、食事摂取が困難な患者に対し、他職種と協働で、きめ細やかな個人対応を行っていたことが有効であったと考える。疼痛に対しては、痛みの程度や鎮痛薬の効果を評価し、歯科医師、薬剤師と連携し患者の疼痛緩和を図ることで日常生活の増加に繋がった。</p> <p>今回の調査で、日々行っている看護ケアと対処方法は、口腔粘膜障害の軽減に有効であったと考える。癌治療遂行の為には、他職種との連携が必要であると考える。</p> | |

| | |
|--|---|
| <p>9. H27 年度学術・研究グループ活動報告</p> | <p>10. 院内感染防止対策グループ ～ラウンド結果からの今後の課題～</p> |
| <p>新潟病院歯科衛生科 ○金子文乃、星 美幸 岩野貴子、野島恵実</p> | <p>新潟病院歯科衛生科 ○関根千恵子、山崎明子 相方恭子、松木奈美</p> |
| <p>【はじめに】 歯科医療の発展や患者の歯科医療に対する関心・意識の高まりに伴い、歯科衛生士もより高度な知識と技術が求められている。歯科衛生士がその専門性を高めるために、学術研究活動を行い、情報を共有化していくことは重要である。われわれ学術・研究グループは以前から行っている情報共有活動を継続し、さらに今回から新入職者への教育も努めたので報告する。</p> <p>【活動内容】 1. 情報提供（情報誌：Study ニュース、学内講演会・講習会の案内およびアンケート） 2. 入会している学会・参加した学会・学術研究活動の内容を把握するためのアンケート 3. 歯科衛生士専門雑誌の紹介 4. 新入職者マニュアルの運営・評価 5. 現任教育（論文検索方法）資料配布・アンケート 今回は4、5、の活動について報告する</p> <p>【結果】 新入職者に対し学術研究グループとして3つの課題を行った。その結果、「学術研究活動内容」「口腔内写真撮影・データ管理」の2つの内容に関しては、理解しやすく日常臨床で活かすことができた。「文献検索方法」については、新人教育1年目では理解するのが難しい分野であった。</p> <p>現任教育として行った文献検索方法の資料配布については内容量や見やすさ・読みやすさに関しては、適切であった。内容の理解度に関しては、「わからない部分もある」という回答が少数あったが、概ね理解できていた。興味がわいたかについては「はい」の回答数と「いいえ」「わからない」を合計した回答数で比較すると後者のほうがやや多く、今後の業務に役立つかについては「いいえ」という回答はないが「わからない」という回答が少数出た。</p> <p>【考察】 新入職者マニュアルに関しては、今回1年という期間の中で進めたが、新人の状況に合わせ、時期を検討し教育を行うことが必要でないかと考えられた。現任教育では発表の機会だけでなく、歯科衛生業務に関する疑問や課題について、または新しい知識や理論を導き出す手段として身近で活用して頂きたいと考えている。そのために学術・研究を日々の活動の中で取り入れてもらえるような内容作りが必要だと感じた。</p> | <p>【はじめに】 院内感染防止対策グループでは、活動の一つとして院内感染防止対策に関するラウンドを行っている。平成25年度から新メンバーでの院内ラウンドを行っているが、各年のラウンド結果とそのフィードバック方法を検討することで見えた今後の課題を報告する。</p> <p>【対象】 診療科10科</p> <p>【方法】 平成25年4月から平成27年11月までのラウンド結果を比較し変化、違いを調べた。グループで作成した院内ラウンドチェック表をもとに、2か月毎にラウンドを行った。出来ていないチェック項目をカウント、評価し、半年毎に各科へフィードバックを行った。当初は口頭だけのフィードバックだったが平成26年4月からは紙面配布を始めた。</p> <p>【結果】 『消毒・滅菌（管理）』における、『滅菌物のインジケータの表示変化』、『洗浄・清掃（実技）』における『鋭利な器具を慎重に扱っている』、『廃棄物（管理）』の『分別』に関してはどの科でも適切に行動が出来ているようだった。平成26年度と平成27年11月までの評価が改善されたのは『適切な防護具使用』における『ケア・処置中での行動（実技）』項目であった。これらに対して出来ていない項目は、『消毒薬の開封日記入』が多かった。</p> <p>【考察】 適切な行動が出来た項目には、過去に現任研修として実技実習を行ったこと、自己防衛の意識の向上により、行動が定着しつつあるのではないだろうか。それに対して改善されない項目である『消毒薬の日付記入と管理体制』については検討が必要と考える。これは学生が開封した時の記入漏れもあり、歯科衛生士の見逃しがあるように思われる。簡単な動作でも学生に対して、各科で個々や反省会など全体で指導を徹底し理解していくことが必要と思われた。ラウンドする私達もチェック目線を統一化し、項目も含め改めて見直していく必要があると考える。また、紙面でのフィードバックと口頭でのフィードバック、さらに改善策も前面に提示出来れば変わっていくのではないだろうか。日々、病院職員および臨床実習生・病院実習生が院内感染防止対策の意味を理解し、行動出来るようにしていければと考える。</p> |

次回の「歯科衛生研究会」は平成 28 年 7 月中旬に開催する予定です。
多数の講演の申し込みをお待ちしています。